

いなむら市長の「い~なこの街 尼崎」 2月

テーマ:尼崎の梅

市長

尼崎の民話「難波の梅」

市内の梅香小学校のあたりは、その名のように古くから梅の香りの高いところで、そのころから難波の里と呼ばれとった。たくさんの梅の木の中で、一本の古木は、それは見事な花をつけ、難波の梅と言われとった。

ある時、天皇さまが旅の途中、梅見に立ち寄られ、古木をご覧になり、たいそう気に入られ、所望され都へもって帰られた。木は、さっそく宮中の庭に植えられ、天皇さまは次の年に花が咲くのを待っておられた。

ところが、春が来て、ほかの木は花をつけるのに、持ち帰った古木には花が咲かなんだ。わずかに咲いた花は、尼崎の方を向いて咲いたそう。天皇さまは、「花にも心があるのだなあ。ふるさとが忘れられないのであろう。」と言われたという。そして、その古木をもとの難波の里へ、戻されたそう。すると、なんと、春を告げる立派な花が咲いたんやて。

それから、何年も何年も古木は、春を忘れることなく見事な花を咲かせたそう。

いつのことからか、その梅の古木の世話をする白ひげのじいさまと、それは美しい若い娘があらわれた。清らかで、凜とした、梅の花のようなその娘を誰いうとなく、「この花咲くや姫」と呼ぶようになった。二人はせっせと、この梅の木の世話をしておった。お日さんと一緒に起き、日が沈むと眠るという暮らしであった。近くに住んでいる人たちは、「あの二人が、ものを食べているのを見たことがない。」と言って、不思議がった。じいさまは、たいそう物知りであった。ことに梅の木のことは、よく知っていて、誰にでも、親切で優しい人であった。

ある夜のこと、ものすごい風が夜中じゅう吹き荒れた。

翌朝、気がつくやと、古木は崩れるように倒れていた。古木は、永い年月、生き続けたせいか、小さな塊になって残っていた。そして、白いひげのじいさまも、若い娘の「この花咲くや姫」も姿が消えるようにいなくなった。

のちにわかったんやが、じいさまは、大昔の偉い学者の「王仁」の亡霊で、娘は、梅の精であったという。二人とも「難波の梅」が好きやったんやろ。

今でも、難波熊野神社では、三月になると白梅紅梅 80 本が花をつけ、梅まつりが行われている。琴の音のひびく境内に立っとたら、梅の花びらが、ひとひら、ふたひら、舞いながら落ちてくる。なかなか風情のある眺めや。「この花咲くや姫」の姿も、梅の木のかげに見えるかもしれんなあ。

DJ(林)

いなむら市長の「い~なこの街 尼崎」。月に 1 度、市長にご出演いただくこのコーナー。今回は、尼崎の民話を市長に読んでいただいて始めました。

市長

こんにちは。「難波の梅」というお話だったんですけども、いかがでしたか？

DJ(林)

梅の花のいい香りがしてきそうな優しく、そして少し切ないお話でしたね。

市長

はい。

DJ(林)

たしか、難波地区には梅の名所として知られる、梅ノ木公園や難波熊野神社があることは知っていたのですが、こんな梅の民話があることを初めて知りました。

市長

この今回のお話は、日本民話の会会員だった三好美佐子さんが、尼崎の民話をまとめられた本の中にあります。他にも、寺町に伝えられる「秀吉とみそすり坊主」ですとか、尾浜の「名月姫」、南清水の天狗塚に残る「天ぐさんと涙」など、30のお話がおさめられているんですよ。

DJ(林)

尼崎に残る民話がそんなにあるんですね。

市長

民話は、「むかしむかし」で始まる昔話を、おじいさんやおばあさんが話して聞かせてくれるように、人から人へと語り継がれるものです。

尼崎の歴史は古く、多くの人々が行きかかったところですから、いろんな民話が語り継がれてきたと思います。

DJ(林)

民話は、当時の生活や風習を偲ばせ、ほのぼのとした気持ちになりますよね。

市長

はい。本当ですよ。

またその中にも、例えば生きていくための決まりや、戒め、人々の願いなど本当にいろんなものが込められていて、おもしろいなと思います。

DJ(林)

今の子ども達にも、民話をぜひ読んで欲しいですね。

市長

本当です。自分で読むのもいいですし、誰か大人に読んで聞かせてもらう体験も子ども達に沢山して欲しいです。

DJ(林)

さて、今回のお話にあった梅が今も咲きほこる難波熊野神社では、梅まつりが開催されるんですよ。

市長

そうです。3月3日日曜日の午前10時からです。

梅むすめがサービスしてくれる梅ジュースを味わいながら、境内に咲く、24種68本の梅を楽しむことができます。また、梅干や梅ジュースの販売、お茶席にもご参加いただけます。梅にちなんだ短歌の発表会も行われるんですよ。

DJ(林)

春の訪れを感じることができそうですね。

市長

3月3日といえば、お雛祭りでもあるわけですがけれども、お雛様の両脇に飾られてる木、ありますよね。あれは何かご存知ですか？

DJ(林)

たしか、桜と橘ですよ。

市長

はい、そうです。京都御所の「左近の桜」「右近の橘」を真似ているといわれているそうなんですけれども、この左近の桜、もともとは梅だったといわれているそうです。

梅と橘が並んでいる様子、実は尼崎市内にもあるんです。

実物の木が並んであるわけではないんですけれども、地名にその名残があるんですよ。お話しした梅は、市役所と2号線の間にある東難波、西難波のあたりが古今集で詠まれた「難波津の梅」があったとされる場所で、「梅の里交差点」また「梅ノ木公園」など今も「梅」がついた施設や建物がたくさんあります。その東難波、西難波の北側に接して、通っているのが橘通りっていう通りなんですね。

このあたりは、平安後期、摂関家へ柑橘を納める果樹園があったということで「橘御園」と呼ばれていたことに由来するんです。

DJ(林)

尼崎がその時代からあって、そこに人々が暮らし、梅の花や橘をめでていた様子を思い浮かべると、とても豊かな情景ですね。

市長

本当に時間の流れがとても早く感じてしまう私たちの毎日ですけど、ちょっと上を見上げて季節のうつろいを感じる時間ももちたいなと思います。

DJ(林)

稲村市長、本日もありがとうございました。

市長

ありがとうございました。